

## 「人間は完璧ではない。そして、私は人間である。」

Marcella MARIOTTI (マルチェッラ マリ奥特ティ)

1. 動機。日本語（文法）習得。私の履歴。
2. 対話とその内容
  - 2-1 「考える」かぎり、文法を間違っても自分でなくなることはない。
  - 2-2 間違いというより違和感。相手が言いたいことを全体として受け取る。
  - 2-3 文法と自分のスタイル。そして、私の不安。
  - 2-4 仕事と違和感。人間は完璧に生きていない。
  - 2-5 現実上の制度。理論と実践。学習と習得
  - 2-6 文法を内化すること。直接方法とやり取りの分析
  - 2-7 担当者によって作られるコミュニティの雰囲気。みんなのニーズに合う必要はない。
3. 結論
4. おわりに

---

### 1. 日本語（文法）習得

20年前から日本語、そして日本と付き合っています。アルファベットではない字、つまり変わっている字を使用する言語に、そして育って来たキリスト教環境と違う環境・文化（？）にも好奇心があったから日本語と日本文化を大学で勉強することにしました。その時言語＝人々がコミュニケーションをするための手段ということ認識していなかった。極端に言うと、日本語話者と会話するのは試験のための練習にすぎなかったのである。留学してショック受けたのはこの言語の裏に『生きている、考えている、人々がいる』ということをはじめて認識したからであったかしら？当時はインターネットではなく、短波ラジオでしか教材以外の生の日本語を聞けなかったのである。（たまに観光客もいたけど）。留学から帰ってきて、身についた日本語のおかげで正社員として店員になれた。そのため、自分の興味は自分にとって日常のリアリティを持たなくなってきた東洋哲学や『教材言語』から現実の日本社会へ移って来た。2年間、ゆっくりオウム真理教について卒業論文を書けて、やっと卒業もできた。

将来に対する計画もなく、日本語を忘れつつでもあり、日本に行きたくて奨学金を応募した。オウム真理教の研究を続けようとも思ったが、当時（1996年）は困難であり、別の研究テーマを先生に勧められ、それを自分にアダプトした。アンパンマン世界の中で見

「人間は完璧ではない。そして、私は人間である。」  
マルチェッラ・マリオッティ

られるジェンダーというテーマはもともと興味があった『言語』へ傾けて、その言語などによって作られるイデオロギーを探求しはじめた。

「変わった言語＝日本語」から、「言語によっても構築されている社会価値観」へ、という興味のシフトがおこなわれた。

博士単位習得で帰国し、すぐ非常勤講師の仕事をやりはじめた。アンパンマンの研究も日本語初級の文法や翻訳を課題にしていたその非常勤の仕事も改めて関心を日本語へ戻させてきたのである。今度は日本語教育学を中心に、イタリアで博士課程に入った。学生時代と非常勤で感じていた不満を満たそうとし、現在のプロジェクト（リアリアを使用するインタラクティブな日本語基礎文法辞典）に掛かり切りである。第二言語習得などの理論も考慮しながら、現実のイタリアでの大学の現状況そして、日本語教育のリアリティーも尊重したいのである。

今でも底に疑問として残るのは以下の点である。これについて興味を持ってそうな方を検討し、対話へ進めたのである。

1. 文法教育の必要性（第二言語と外国語における必要性の違い）
2. 文法教育の楽しみ（学習より習得をめざして）
3. 大人には興味だけを通して、文法その物を習得するのは可能であろうか。
4. 最低の文法だけでもコミュニケーションができるが、どうして満足していないであろう。どうして今でも直してもらいたいのであろうか。
5. 自己実現には文法も必要ではないか。文法も正しくなければ、いつまでも自分が（一人前ではない）子供だと感じているからそう思うのであろうか。

このテーマに関する対話はブレインストーミング・セッションになったらいいなという期待があった。

自分の研究はまだ未熟なで、先生に依頼してこのような授業に参加させていただいたのに、ちょっと批判的な疑問を持つとは... しかも以上の疑問はとても個人的で感情にも訴える疑問で...

迷いながら、恐る恐る、「学習者主体」や「考えるための日本語」など先駆的な日本語教育を考案した細川英夫先生にまで対話の依頼も持ち運んだ。

## 2. 対話とその内容

対話相手：細川英夫先生

日時：2008年11月18日（金）15時から16時20分

場所：先生の研究室

（遠征の名前はHで、自分の名前はMか「マ」に省略した）。

先生に改めて自分のテーマを読んでいただいた。

「人間は完璧ではない。そして、私は人間である。」  
マルチェッラ・マリオッティ

第二言語としてのイタリア語の習得の専門家であるバルボーニ先生の理論と細川先生のいう自己実現や学習者主体などの理論とは重なる部分がある。その重なっている部分には私が興味を持っている部分で、博論で取りあげてみた。自分が持っている興味について第二言語や外国語で話せるようになりたいとは習得に至ることができる強い動機になると私も思う。ただし、様々な方法で20年間近く日本語と接触しても、母語話者との差は大きく感じる自分の例を挙げて「大人には興味だけを通して、文法その物を習得するのは可能であろうか。」とう疑問3から対話をスタートさせた。

## 2-1 「考える」かぎり、文法を間違っても自分でなくなることはない。

M その理論と実践。私の歴史から見たら... 興味があつて、例えば今回も自分の興味で色々話して、書いて、間違いをして。意識していると意識していない間違いもあつて。これは自分の自己実現とはどのように関わってくるのと、やはり、直してもらいたい、大人らしい日本語で話せるようになりたいということ。これらは先生の自己実現の理論と事実はこちらとずれているのではないのでしょうか。まあ、すぐ考えていることは出てきませんね。やはり、考えています（のですぐ自分の考えを言葉と置き換えにくく、話はゆっくりしかすすめない）。理論と私の日本語の習得履歴を考察すると先生はいかが思いますか。

H 言語を使うということは経験だと僕は思っているんですね。経験の量と質二つの問題がありますけど、経験の量はとても大きなファクターというか、だと思っんです。(...) 日本の母語話者の40歳の人とはちょっと違うと言ったのは、それは当...日本語の隠喩という点ではそれは当然というか。それは経験、日本語と接している、もう時間が決定的に違う。(...) 人間は時間を超えることができないから。(まだですね) まだだね。(...) 日本だろうと、どこだろうとヨーロッパだろうと、もうそれは人さまざまで。だと思っんですね。一人一人考えてることはね。(...) それはたまたまそれはマさんが日本語を最初ターゲットとして勉強して、で、日本社会を一つのターゲットというふうにしたから、どうしてもそのターゲットに対して自分の言語を使う力というのをいつもこう、距離を感じるの、当然のことだけれども、けしてそれはマさんが考えていることは自分でないという意味ではないんですよ。

なるほどと思った。「考えるための日本語」にはこういう意味があつたのだ。自分が考えている。どんな言葉で考えてもいいし、どんなに文法の間違いなどをしても考えているのだ。子供のように、完璧な言語表現を使えなくても「考えている」から、間違っても自分でなくなる訳ではない。ああ、そう。確かにそう。文法の間違いは人間の本質的な問題ではない。しかも、先生は

「母語話者の日本語に限りなく近づくために、様々な方法で日本との接触を長くする他はないとおっしゃった。それから、「同じである必要はない。つまり日本語母語話者と。...」

「人間は完璧ではない。そして、私は人間である。」  
マルチェッラ・マリ奥特ティ

自分が一所懸命日本語を勉強しなかったことを認識はしていた。そして、母語話者の日本語と近づきたいという気持ちが同僚に対するねたみからでも、今までの努力を無駄にさせないというプライドからでも発生するというのも確かである。だからだ！日本語は自分を表現するためではなかったからこそ習得はしなかったのであろう。と考えるようになった。確かに、自分の日本語能力に対する不満を感じているのはもっとも個人的な考え（感情）を伝えたい時である。他に、論文にしろ、発表にしろ、直してもらえれば済むと思うからである。だからこそこの「考えるための日本語」の中心である自分の過去現在書来と関係のあるテーマは、やはり、学習ではなく、習得を目指せるのであろう。他人に対する（ねたみやプライドという）気持ちではなく、自分の中にある考えや気持ちを理解と整理して他人に伝えるのは内面的な動機になってくるからのであろうか。（現実のライフでのように）主体者は自分になってしまった。こう考えれば、このような日本語の授業は自己理解が行われている場になる。今ちょうど、レポートを書きながらその作業中である。

## 2-2 間違いというより違和感。相手が言いたいことを全体として受け取る。

でも、現実の「他人」がいて、「学生」であるその他人らにどのように直面すればいいであろう。

対話に戻り、しつこく先生に聞いてみた。

M 「考える」というこのプログラムで最終的に自己評価するよていである。だが、自分がまちがった部分とかはどのような形で直してもらえるのでしょうか、学生は母語話者じゃないと直してもらっても納得は行きません。

H あのう、だから、その時に、あのう、ただマさんは何かに、やはり正しい、母語話者が話す正しい日本語というイメージがあるんだと思う。多くの学習者はみんなそうやってたしかに勉強している。世界中の日本語学習者、日本に来ている人も含めて。だけど、それをぼくは疑いたい。つまり、その間違いを判定するときに、色々なレベルの間違いがあるんですね。例えば、感じの字が違うとか、それから助詞が違うとか、それから文の形がちょっと僕が通じないとか、それから文の形がいいんですけど、その場面ではそういうふうに使わないとか。で、ところが、たとえば私がそれを受け取る時には、あのう、全体として受け取りますよね、その人を言いたいこととしてこう受け取る。文、一つ一つ順番にこう受け取るのではなくて、その人が言いたいこと何だろうと思いつつこちらが、僕が、聞きますから。僕じゃなくても、誰でもそうだと思いますけど。そうすると、そこが何か違うな、で、どこだろう、何が違うのかな、とっていて、ああ、ここだというふうに思う。だけど、それは、僕がそう思うけれども、本当にそうかどうかは、よく分からないことが多い、しばしばなんです。

M 母語話者の方であっても...

「人間は完璧ではない。そして、私は人間である。」  
マルチェッラ・マリオッティ

H で、それはあの、そこはだから、日本語母語話者がみんなそう考えているのではなくて、もちろん、もっとすごく。つまりそれは人によると思うんですが、すごく言葉の形にとっても、規範式をとっても持っている人もいるし、あの、そこ、それ、そんなに持っていない人もいるし、僕の場合は、昔は持っていた、まあ今も持っている、持っているけれども、あの、この仕事をやる、だんだんやっていくうちに、ん、間違いというのは、なん、どん、何の間違いなのか、何が違うのか、ということがぼくにはよく分からなくなって来たんですね。... はじめは直していたんですよ。これが違う、こうやって。直すとなんかの文書になる。... ところが、まあ、やっているうちに、本当にそうかな、と思い出して、で、あのう、「何ですか。ここはどういう意味ですか」と聞くようになったんです。学生に。そうすると「いや、ここ、こういう意味です」とゆってくる。そうしたら、だったら「あそうか。ああ、そういう意味だったらこれでもいいし、でもそうしたら他の文、僕が直した違う他の部分を変えて、そこは直さないで、そこは直さないで、他の部分を変えらるともっと良くなる」とか。

先生は自分の経験を語ってくださってとてもありがたく感じた。ご自分の仕事に対する熱心と愛と信念までの展開を味わうこともできて感動した。

M そうすると、例えば「買ったペンは赤いでした」学生に書いてもらうときはどういう扱いなさいますか。

H だから、文の形だけで、切り取って考えるとそれは、たしかに、法則がある。確かに法則がありますよね。(...) 要するに、部分と全体の問題です。部分を取り出して、言うことができるけれど、それは、意味があるのかな。つまり、ん。

M でも、コンテキストの中であっても、間違いだから。言いたいことは理解できます。「買ったペンは赤かったです」。けれども、間違いでありながら、直さない、か。。

H いいえ、だから、いままで、ずっと言語学、今日本語教育と言われて来たのはその部分を要するに、切り取って、その部分を取って「ここは間違っている」という間違っているというのはね、非常に、あの、なんというかな、そこだけを見てくるわけですよ、その部分だけみて。

M でも、文脈があっても間違っ。。

H 文脈があっても、だから、なんと言え、

M 例えば、この文脈（テーマを見せながら）の中で間違いがあります。

H でもそれはね、なんというかな、それはプロセスというか、結果じゃなくてプロセスとしてきている訳だから、間違いというよりも、違和感なんですよ。完全な間違いではない。なんというか。違和感。

M もちろん「ペンは赤いでした」というときも過去を表現したいということが理解ができます。

「人間は完璧ではない。そして、私は人間である。」  
マルチェッラ・マリオッティ

H そう。違和感だからそれはそんなに積極的に母語話者として直すべき問題ではないと僕は思っています。

まだまだ「考える」というプロセスを部分的に（文法的に）直す意味がないということを理解しにくかった。「日本語」と「考えること」を結びつくにはもう少し先生の努力がかかったのである！自分が分からないことから脱走しようとした。話題をちょっとずらして、自分の文法辞典へ持っていった。

### 2-3 文法と自分のスタイル。そして、私の不安。

イタリア語話者向けの日本語岐路文法辞典という自分の研究課題を紹介してから、イタリアでの日本語話者講師とイタリア語話者講師の分担割合を説明しながら、自分の将来に対する不安も浮かんで来た。

M 一般的に日本語話者の講師がいて初級日本語の教科書を使って、それからイタリア語話者は殆ど翻訳や読解や文法ですね。

H ヨーロッパはそうですね。だいたいそうですね。西ヨーロッパも。

M もし本当にポストとかがあっても、自分の位置が一番低いですし、すべてを変えることは無理でしょう。また、先生の理論とイタリアの BALBONI 先生がいう動機や自己実現などを文法を教えることを考えるときに、どういう形でこれらの理論をベースにして文法を教えられるのかは疑問です。動機と自己実現の理論にそっていきたいので、今の日常的なリアリアを使用した文法辞典を製作中なんです。（具体的な説明：バスや駅などでとった文書の画像や動画を例にして、そこに出てくる文法項目をクリックするとその文法項目の構造や説明や他例などが現れてくる）。ある程度学生は自らで楽しむように、ゲームのようにすべての例文をリンクさせてある。取得するための道具として考えてんですけど。でも、授業と理論の結びは見つからないんです。たとえば140人ぐらいのクラスですから。難しいです。理論と実践を合わせるのが...

自分の研究の説明は不足で、対話の話題は文法の間違いより違和感だという点に戻った。文書の正しさは文脈的に、そして歴史的に相対的であるため、「H 最終的には自分のスタイル（文書を書くときに、あるいは話すときに）自分のスタイルを捕まえばいいと思うんですよ。」

### 2-4 仕事と違和感。人間は完璧に生きていない。

H 核になるのは自分のスタイル。自分がこうやって書く、こうやって話す。やはりその人の個性というか、個性のある書き言葉、話し言葉とか。もちろん、だから、そこで、いっぺんにこの、例えば、これだけのことを、例えば敬語のシステムがこういうふうになって

「人間は完璧ではない。そして、私は人間である。」  
マルチェッラ・マリオッティ

いると、そこに沢山の形、語彙などがあってもやはり最終的にそれを100%学習するのは不可能です。まず時間がかかります。母語話者だって、そのシステムその物は明らかになっているわけではないから。いわば、歴史的にいうとみんな間違っている人は沢山いる。でも、その人のなんだろう、やはり、固有のスタイルをもって、その問題はすこしずつ意識して、解決していくしかない。

M でもたとえば今でも私は尊敬語や謙譲語でも色々間違っています。でも指摘されなければどのように...

H いや、指摘されないじゃなくて、それはもし違ってくると、決定的な違いもし、決定的な問題があればそれは「分からない、どういう意味ですか」などで指摘されます。

M でもそれは先生が優しいからでしょう。もし仕事になったら...

H (...)仕事をしながら覚える訳でしょう。当然。ある意味では、仕事をしながら、お金をもらって失敗しながら、教室の中も、教室のソトもないんですよ。別に区別がない。 (...)ビジネスの世界だから失敗したらいけないというけど、それはすごく完璧なところを基準にして考えればそうだけ。でも、私たちはそんな完璧に生きてないから。

M でも1年生は通訳にはいかない...

H だけど、だから、もう1年生の時から同じ社会、いわゆる仕事、もちろん仕事ではないけれども同じ形で、「言っていることを分かるか分からないか」まず、通じるか通じないかというところから始まる。まあ、それはこれですよ。この考え方(私の書いたテーマの用紙をさしながら)。つまり、本当の文脈がある。

## 2-5 現実上の制度。学習と習得

ヴェネツィア大学では100人ぐらいの学生がいて、このような個性のスタイルを把握できるような(学習より習得まで至るような)授業はできそうもないと思った。

H まず制度的な環境が必要。今やってるのは自分で決められる授業で、だからできる。選択制で。内容は説明、前もってしてあって、読んできて、そうやってくる。基本的に100人の学生で、それはできない。これは本当のコミュニティを作ろうということで、150人で本当のコミュニティはできない。

M 新しく開かれたコースなら、小さい大学で、できるかもしれません。

H でも同じようにやる必要はない。

M もちろんそうですが、気になっていたのは今のままだと習得になりません。これは学習です。

## 2-6 文法を内化すること。直接方法とやり取りの分析

「人間は完璧ではない。そして、私は人間である。」  
マルチェッラ・マリオッティ

H それで、まあ文法教育との関係でいうと、こうやっている内に、文法の構造、日本語の中に入っている構造、いつの間にか。。。構造を使わなければ文は組み立てられないから、それは沢山使っているうちに身に付きますよね。

M これは母語と第二言語の習得が似ている点ですね。

(娘のアリーチェの第二言語習得について)

H だけど、私は第二言語と母語の習得は全く一緒とは思っていない。大人の場合にはお互いのやり取りを分析的に聞くことは必要だと思っている。だから、質問胃答えるということだけではなく、分からなくても、少し、例えば一時間ぐらいやり取りをやって、他の人を見て、観察して、分かるようになる。

M じゃあ、直接方法になりますね。

H もちろん、日本語だけでやります。直接方法はフランスで思われて、それから日本に入って来た。

。。。 (イタリア語教育と直接方法)

H 基本的に直接方法だと思います。それは無理がないと思います。

M 昔の直接方法と先生の直接方法との違いは教室の内と外はなくなったということでしょうか。

H まあ、まあ、そうですね。最初の直接方法はやはり、この文型・語彙を教えるというのは最初に決まっていて、そのために教室を作るんですね。よくにっていますけれども。やり取りをしながら、その文型と語彙を身に付くけれども。伝統的な教授方法は決まっていた物を決まった時間の中で教えるのことは目的だった。けれども「考えるための日本語」では、僕はそれをやっていない。あまり、一番最初やりますけれどもよくないんです。

**2-7 担当者によって作られるコミュニティの雰囲気。みんなのニーズに合う必要はない。**

M でもやはり、外国にいると例えば、どのように「です／ます」の使い分けがみにつけます？日本にいるとある程度日常の会話の中で使えますが (友達／先生)、外国だと...

H 親しい・親しくないという区別で説明するが、人間関係の中でしか使えないね、言葉は。コンテキストの中で覚えていくでしょう。

M 海外の場合は？

H 担当者の作るコミュニティの雰囲気によるでしょう。(ご自分の例)

M 元に戻しますが、母語話者じゃないとこれはできないでしょう。

H いや、だからそれはスタイルによります。自分のスタイルはあるから。

M でも学生たちの期待があります。



「人間は完璧ではない。そして、私は人間である。」  
マルチェッラ・マリオッティ

H その期待は「ちゃんとした日本語」かすぐ使いたい日本語か、アカデミック日本語をならいたいとか、全部満たすことができない。僕でも、前に説明よくしておいて、その説明に賛成したら入って来てくださいというの。学生の類は色々ですから... みんなのニーズに合う訳ではない。

このように対話を進んでいくうちに、自分の不安を何回も繰り返すようになってしまった。母語話者じゃないから、それを期待している学生の前に立って講義するのはすごくこわかった。

はじめて非常勤した時、学生は15人にすぎなかった。日本語の文献をインターネットや図書館で探すという目的も限られて、はっきりされていて、講義ではなかった授業を学で使途一緒に作っていったのである。学生は興味や好奇心のある話題について活発的にやっていたのである。懐かしい。

今までやってきた日本語の文法の教え方を変えたい。

今度は文法を教えるという授業で、考えながらその文法を学生に内化させる。というより、学生自身は発言を繰り返しながら自分の考えを伝えるための文法を求めながら内化するというプロセスにしたいと思っている。でも... 制度の問題がある。でも提案してくださったように特別な人数が限られた選択科目のコースを開けば...

先生に自分の研究を認めてもらいたくて、このようなプロセス、つまり私は習得に最も適切な教授方法であると考えているプロセスの中で、自分の文法辞典の意味について聞いてみた。文法を内化するには合わないかもしれないと。その意味は自分で探らないといけないものである。

何回も何回も、間違いの直し方について聞いたりしていた。先生が「違和感だから直すのではなく、発言者のやり取りの中でその意味を明確にするの」ととても親切に繰り返してくださった。

### 3. 自分の考えのまとめ

テープを起こしながら、このレポートを書きながら、振り向いて、自分がどのぐらい「子供のように」ふるまったのかに気がついた。これは（学生であれ、先生であれ）他人に認めてもらいたいということであった。また、自分が「子供」の立場にいたいということが先生に対しては平等的な研究者ではなく、先生／学生（親子）という姿勢をとったことにも見える。（もちろん経験の面では先生・学生ではあるが！）イタリアでやったことは、つまり習得ではなくて学習にしか至らない教え方は、自分の「せい」ではなく、制度のせいであると指摘した時も、また責任を担わない子供のようにふるまうことに違わない。

将来に対する不安は自分が大人になるための努力をしない限り、なくなることはないであろう。親でありながら「親探し」のゲームをするのはやめる時期がやってきた。これに

「人間は完璧ではない。そして、私は人間である。」  
マルチェッラ・マリオッティ

気がついたのはこの対話の「準備と現場とレポート」のおかげである。

完璧ではなくてもいいから、好きなことを仕事にすればその喜びで心を満ちて、娘も含む他人に認めてもらうより、その喜びを表現できるように頑張っていきたい。

#### 4. 終わりに

「考えるための日本語」という活動は私にとっては考えるための時間をくれた活動であった。ばたばたしながら、毎日の「やるべきもの」を自動的にやって、自分が歩いている道の行方や、自分の活動の意味や、それらの意味と動機について、考えるための時間をなかなか取らなかったのである。大事な選択をしないとイケない時以外、自分にとって何が大切なのか、どうして大切なのか、また、何が好きでとその理由についてじっくり考えるための時間を自分に与えられなかったのである。

この活動の御陰で「やるべきもの」自体が「考える」ことであって、やっとその時間を得られたのである。話題を選択した時も、一番悩んでいるテーマを選んだ理由はそれについてじっくり考える必要を非常に感じていたことにある。過去／現在／将来と関わるテーマを話題したら、「考えるための日本語」の皆様も自分と同じように不安や悩みなどがあり、自分と同じように考える行為自体で頭が疲れてしまい、自分と同じように「自分の中でまだ解決してない点を一所懸命探してみよう」という動力をしていた。その内面を表現する道具として母語ではなく日本語であったことはそれほど「じゃま」ではなかったと気がしたのである。困難だったのはその内面を探ることじたいであった、と私は感じた。対話はその内面を表現化をするきっかけであった。しかし、私にとっては対話が起こした疑問と変更についてクラスの皆様とのやり取りはとても重要であった。考えてことを伝えたい、それについて話し合いたいと感じさせたのはクラスの中でだんだん作られてきた関係なのであった。「考える日本語」のすばらしさはテーマを選ぶときの「自分向き」は、対話によって「外向き」になり、対話レポートによってまた「自分向き」になり、相互自己評価によってまた、違う形で「外向き」になることにあると思う。しかも、この「自分・外」というやり取りはコミュニケーションである。予備コミュニケーションではなく、コミュニケーションの現場である。それは、MLにしろ、教室にしろ、対話の現場にしろ、現場であった。何度も既に言ったが、クラスのメンバーにもよると思うが、クラスの中で人間関係はコミュニケーションをするための動機を与えてくれたのである。感謝します。